

この世のカラクリ！

<天才とバカ・幽体離脱・能力喪失>

無料レポート



生きるドットコム

山口 ひかる

<http://info@1ikiru.com>

(注意) e-book 内容の無断での引用転載を禁止します。

綺麗なバカで生きてやる！

人の幸せは、能力、財力、体力などの持ち物では決まらない。 幸せは人柄が決める。

はじめに

<生い立ち>

●1960年 福岡県で普通のサラリーマン家庭に生まれる

●0～3歳

身近な大人から天才ではないか、と言われていた

自分が天才とはっきり分かったのは、保育園に通いだしたとき

●4～8歳

医療ミスから脳に障害を受け知恵遅れに近い状態になりました

この時を境に、以前の記憶は徐々に消えていきました

つらい人生の始まりでした 小2のときに首吊り自殺未遂

平均レベルの人たちが雲の上の人たちに見えました・・・今もそうですが

●9～14歳

いじめを受けましたが、学生期間の中ではこの頃は楽しかった

●15～24歳

学校の勉強以外のことは何も学びませんでした

●25～27歳

働くことは辛いだけだと感じていました

●28～33歳

普通の人に比べれば遅いですが、この頃が自分の青春真っ盛りでした

●34～42歳

社会人になって、初めて、仕事が少しだけ楽しいと感じました

●43歳～

ある日、母親の産道を通して産まれる瞬間から3歳までの記憶がよみがえりました

そして、頭の良い人と悪い人では、世の中の見え方が、まったく違うことを発見しました。

これにより、①強者の考え方での人生 ②弱者の気持ちでの人生 ③両者を理解した人生
と3人分の人生を歩んでいます。

これらの貴重な体験により、ぼくに最も欠けていたものは、人柄だと気付きました。

綺麗なバカで生きてやる！

人の幸せは、能力、財力、体力などの持ち物では決まらない。 幸せは人柄が決める。

* “天才” と “知恵遅れ” *

みなさんは、「人の能力にほとんど違いはない」ということを聞かれたことがあると思います。

やる気系セミナー講師がよく言います。 だから頑張れと・・・その講師は本当にそう思っているのかも知れません。

しかし、これは誤りです。
神に誓って言えます。

僕は小学生の頃から何をやってもクラスでビリかビリ2でした。かけっこ、勉強、社会生活、喧嘩、精神面、人柄等 全てが普通の人よりはるかに劣っていました。

だからいつも心の中で、
「何かひとつくらい平均レベルのものがあれば、みんなのように学生生活を楽しめるだろうにな～」といつも思っていました。
僕にとっては普通の人雲の上の人だったのです。

僕からみた頭のよい人とは、“記憶力”がよく“頭の回転”が速い人です。
記憶力がよいのは、“忘れない”ことだと思いますが、
「頭の回転が速いと言うのはどういう状態なのだろう？
頭の中で何が起きているのだろう？」、

そして、

綺麗なバカで生きてやる！

人の幸せは、能力、財力、体力などの持ち物では決まらない。 幸せは人柄が決める。

「頭のよい人から見たらこの世界はどういう風に見えるのだろう」と疑問に思っていました。

又、そのことが知りたくて仕方がありませんでした。

プロフィールに記載していますが、僕は3歳の頃までは天才だろうとよく大人から言われていました。

それが医療ミスで脳に障害を受け、ほとんど知恵遅れの状態になりました。記憶がほとんどできなくなったのです。

そして、小学校に上がる頃には3歳ごろまでの記憶は全てなくなっていました。

43歳になるまでずっと僕は、生まれつき頭が悪いんだと思い込んでいました。それがある日、突然3歳までの記憶がよみがえったんです。

それで分かったのです。

なぜ、頭の良い人はみんなより早く考えることができるのか

綺麗なバカで生きてやる！

人の幸せは、能力、財力、体力などの持ち物では決まらない。 幸せは人柄が決める。

* 並列処理 *

天才だといわれていた頃、僕は五つのことを同時に考えることができました。

「ぼくは頭の中でかなりたくさんを同時に考えているけど、最大いくつ同時に考えられるのか？」知りたくなり、自分が考えられる最大限を同時に考えた状態にして、いくつ考えているのか数えてみました。

答えは5個・・・「意外に少ないな〜」というのがその時の感想でした。

念のためにもう一度数えて直してみましたが、やはり5個。でも、何か違和感を感じていたのもう一度数え直している途中で気がつきました。

あと一つは数えている自分自身だったんです。例えて言えば、メインパソコンが1台あって、サブパソコンが5台ある状態です。

つまり、並列思考数が頭の回転の速さを決めているのです。

綺麗なバカで生きてやる！

人の幸せは、能力、財力、体力などの持ち物では決まらない。 幸せは人柄が決める。

日常生活で、この5個あるサブ思考は以下のように使っていました。

1つ目は静止しているものを認識する為に、

2つ目は動いているものを認識する為に、

3つ目は考え事に使っており、

残りの2つは突発事件が起こった時に、今までの思考を停止することなく、対処できるように予備として取っておきました。

当時は、自分の両親を含めて周りの大人たちが間延びして見えました。

「どうしてみんな僕と同じような頭の使い方をしないのだろうか？」

と、不思議に思っていました。

具体的には、ほとんどの大人たちは他人を非難するだけで、

自ら問題解決をしようとしていないことを不思議に思いました。

でも、安心して下さいね！

今のぼくのサブ思考数は0です。

全てメイン思考だけで処理しているので、

いつも頭の中は忙しく、すぐに頭がパニックになります。

綺麗なバカで生きてやる！

人の幸せは、能力、財力、体力などの持ち物では決まらない。 幸せは人柄が決める。

* 幽体離脱 1 *

3歳の夏の終わり頃、ぼくは風邪をこじらせて、ネフローゼという腎臓の病気になりました。

40年以上経った今でも完治しない病気といわれています。

半年間入院していました。

山口県 光市立病院に入院していたのですが、院長先生に、「もう直らないから自宅療養しなさい。」と、退院を勧められたほど酷い状態でした。

ネフローゼと言う病気は、別名慢性腎炎とも言われ、当時は不治の病とされていました。

腎臓が冒されたために、身体に有害な物質が尿として排出されずに体の中に溜まっていく病気です。

最初に、院長先生に診察してもらった時は、

「なぜもっと早く連れて来なかったのか」と母親は酷く叱られていました。

ぼくも母に体の不調を何度も訴えたのですが、

その度に根性が無いような言われ方をされるだけでした。

それだけならいいのですが、体がだるく外で遊ぶどころじゃなくても、夏の炎天下に外に放り出されていました。

家の内側から鍵をかけられていたので、外にいるしかなかったのです。

綺麗なバカで生きてやる！

人の幸せは、能力、財力、体力などの持ち物では決まらない。 幸せは人柄が決める。

その内、ぼくも母親に体調不調を訴えることをあきらめ、ただただ炎天下の中で我慢する日々を過ごすようになりました。

このように母がぼくに辛く当るようになった理由については、また別の機会にお話しようと考えています。

では、ぼくが生死をさまよっていた時に経験した幽体離脱についてお話しします。
経験したことがない人は、信じられないかもしれませんね！
ぼくがあなたの立場ならきっと信用しないでしょう！（笑）

しかし、夢ではなく本当のことなんです。

入院してからもぼくの病状は一向に良くなる気配はありませんでした。昼間はそれほどでもないのですが、夜になると苦しくて苦しくてたまりませんでした。

最初のうちは父親の励ましもあり、いつかは直ると信じていました。だから、ネフローゼで苦しくても耐えていました。

しかし、2ヶ月もそのような苦しい状態が続くと父親や院長先生の「頑張ればきっとよくなる」と言う言葉も信用できなくなってきました。

綺麗なバカで生きてやる！

人の幸せは、能力、財力、体力などの持ち物では決まらない。 幸せは人柄が決める。

「一体いつまで頑張ればいいのか？ ぼくはもう充分頑張った！」
と父に訴え困らせた事もありました。

そして、ある日ぼくは生まれて初めて挫折をしました。
保育園に通っていた頃は、勉強、ケンカと全てがダントツ1番でしたので
挫折を経験したことがありませんでした。

しかし、あまりにもしつこく、あまりにも強いネフローゼに、
ぼくはついに降参したのです。
夜中にネフローゼと闘い苦しんでいた時、
そのあまりの辛さに闘うことを止めました。

そばで見ていた母親からはぼくが死んだように見えたのでしょう。
ぼくの名を何度も叫ぶ声が、かすかに聞こえました。
院長先生はぼくの脈を取り、「気を失っただけです」という声が聞こえました。

ぼくは気を失ったのではなく、戦うことを止めてじっとしていただけでした。

この時ぼくは、保育園に戻ってもみんなに合わせる顔が無いと思いました。
それまで負け知らずで生きてきましたから、病気に負けたことが情けないやら
恥ずかしいやらでいっぱいでした。

綺麗なバカで生きてやる！

人の幸せは、能力、財力、体力などの持ち物では決まらない。 幸せは人柄が決める。

「保育園に戻ったら、このことはみんなに黙っておこうか！？」

どうせみんなには分からないことだし・・・

でもぼくは分かっている・・・

この現実から逃げると・・・

これから先も逃げ続けるようになるのでは・・・」

そのような思考が頭の中でおこりました。

結局、退院する時までには決めようと問題を先送りしました。

前置きがかなり長くなりました・・・すいません

それから、ネフローゼと毎晩戦う日々が続きました。

ぼくの記憶では、闘うのを止めたの1回だけだったような・・・

ここは記憶がはっきりしません

ある晩、ネフローゼと闘っていた時、気が付くとぼくは夜の病院の廊下に立っていました。

「なぜぼくはここにいるのか？」分かりませんでした。

とにかく親を捜そうとしました。

病院内を徘徊していると、明かりのついた病室の中からぼくの名を呼んでいる声が聞こえてきました。

綺麗なバカで生きてやる！

人の幸せは、能力、財力、体力などの持ち物では決まらない。 幸せは人柄が決める。

母の声でした。

ぼくは中に入ろうとドアノブに手を伸ばしました。

（3歳のぼくにとって、ドアノブはかなり高い位置にあり、開けづらいものでした。）

ところが、気が付いたらもう部屋の中にいました。

ぼくはすぐに後ろを振り返りました。

（誰か親切な大人が、開け辛そうにしているぼくを見て、開けてくれたと思ったのです。）

でも、ドアは閉まったままです。

いくらなんでもこんなに短時間にドアを開け閉めできるわけ無い。

ぼくの頭は？？？でした。

又、母親が、ぼくを呼ぶ声がしたので、この不思議な現象の解決は後回しにすることにしました。

父と母の背中が見えました。

ベッドに寝ている人の方を見えています。

「誰かのお見舞いに来てるのかな？ そんな話は昼間聞いてなかったけど……」

ぼくは誰をお見舞いに来ているのか知りたくなって、ベッドに近づいていきました。

近づいてもなかなか姿が見えません。

かなり近づいた時にその理由が分かりました。

ベッドに寝ていたのは小さな子供だったからです。

綺麗なバカで生きてやる！

人の幸せは、能力、財力、体力などの持ち物では決まらない。 幸せは人柄が決める。

「誰だろう？ ぼくと同じぐらいの子だな！

それにしてもぼくをほったらかしにして他の子のお見舞いに来るなんて・・・
それに黙っていなくなることは無いだろう」と思いました。

ぼくは母親の手を握って、「ママ、この子誰？」と尋ねました。

母はびっくりして手を引っ込めました。

そして、隣にいた父に言いました。

母：「今、誰かわたしの手を触った。それに〇〇〇（ぼくの名前）の声が聞こえた。」

父：「誰も触っていない。気のせいだろう」

「ぼくは、何故無視されるのだろう・・・」

もう一度

「ママ、ぼくここにいるよ」と言いましたが、

今度はまったく聞こえていないようでした。

母の手に触れるとぼくの手が突き抜けるのでおどろきました。

試しに父や院長先生の名を呼んでも反応はありません。

みんなはなぜぼくを無視するんだろう？

それとこの子は誰だろう？

「こんな小さな子が、こんなに顔をゆがめて苦しそうにしている。可愛そう。」

さっきまで、ぼくをほったらかしにして見舞っていたこの子に嫉妬していたのに、

綺麗なバカで生きてやる！

人の幸せは、能力、財力、体力などの持ち物では決まらない。 幸せは人柄が決める。

いまは苦しみに歪んだ顔を見て同情にかわりました。

そして、その子の顔をジーと見ていると、意識がポーっとしてきました。
気が付くとぼくはベッドに寝ていました。

「ママ、さっきの子は誰？ どこに行っていたの？」
母が返答に戸惑っていると父は、
「ずっとここにおいて〇〇〇を見ていた。 どこにも行くはず無いじゃないか」
と返事が返ってきました。

ぼくは自分の経験と父の話を結び付けようと試みました。

そうです。

さっきまでぼくが見ていた子は、僕自身だったんです。

なぜ、こんな現象が起きたかはおいてといて、
「ぼくがネフローゼと闘っている時にはあんなに顔を歪めているのか～。
可愛くないぞ～。」
と思いました。

綺麗なバカで生きてやる！

人の幸せは、能力、財力、体力などの持ち物では決まらない。 幸せは人柄が決める。

* 幽体離脱 2 *

ぼくのネフローゼの病状は、日に日に悪化していきました。

そして、夜中に危篤状態になった時、2度目の幽体離脱が起きました。

ぼくは、又病院の廊下に立っていました。

今回は2度目なので、この現象を考えてみることにしました。

「何故このような状態になるのだろうか？」

ぼくは、いつものように思考を開始したのですが、

いつもの並列思考が出来ませんでした。

当時のぼくは5つの事を並行して考えることが出来たのですが、

今はそれができない。

(この理由はあとで分かりました。)

仕方なくぼくは、とりあえず、前回同様に自分の病室を探すことにしました。

ところが、歩いている途中で違和感を感じたので自分の身体を見てみると、

なんとぼくの右腕の形が崩れ始めているのです。

ぼくは、あまりの驚きで泣き出しそうになりました。

しかし、その間にも形が崩れていくことを考えると、

泣いている場合ではないと思い直し、

右腕に意識を集中し形を戻そうとしました。

綺麗なバカで生きてやる！

人の幸せは、能力、財力、体力などの持ち物では決まらない。 幸せは人柄が決める。

すると不思議なことに、少しずつ自分が思い描く形に変化していきました。
ところが今度は左腕の形が崩れはじめている。

今度は左腕に意識を集中する。

「だが待てよ！他の所も崩れているのでは？」と体中に目をやると、
両足やさっき修復した右腕も形がどんどん崩れている。

ぼくはあきらめることにしました。
修復するスピードより崩れていくスピードの方が、圧倒的に速かったからです。
身体が人間の形からどんどん崩れていくのを無視して、
病室を探すことにしました。

ただ、少しずつ崩れていくのがうっとうしいのと、自分の意思とは関係なく、
くずれていくのがしゃくに触ったので、僕は自分の意思で完全に形を
崩してしまいました。

これで母親に会っても、ぼくだと分からない形になってしまったことが、
少し悲しかったのですが・・・

1度目の幽体離脱の時もぼくの存在に気付いたのは1回だけでしたから、
「まっ、いいか！」と自分を納得させました。

綺麗なバカで生きてやる！

人の幸せは、能力、財力、体力などの持ち物では決まらない。 幸せは人柄が決める。

看護婦さんたちがあわただしく出入する病室があったので、そこだろうと思い近づいていきました。

病室には、前回同様に両親と院長先生、看護婦さんがいました。

ぼく（魂）は、ぼく（肉体）に近づいていきました。

苦しさに顔を歪めているぼくがいました。

「本当にぼくは酷い顔しているなあ！」

時々「う～、あ～」と言ううめき声が口から漏れていました。

その時、フッと疑問がわきました。

ぼく（魂）は、ここにいる。

では、ぼく（肉体）は、誰の意志でうめき声を出しているのだろうか？

ぼく（魂）は、この疑問を解くために、自分の身体の中に入ってみることにしました。

ベッドの真上に浮かび上がり、ぼくは体の中心に向かって飛び込んでいきました。すると、そこではなんと・・・

綺麗なバカで生きてやる！

人の幸せは、能力、財力、体力などの持ち物では決まらない。 幸せは人柄が決める。

* 幽体離脱 3 *

すると、そこでは5つの魂が、ぼくの肉体の面倒を見ていたのです。
これで二つのなぞが解けました。

幽体離脱した際に5つのことを並行して考えることができなくなったのは、
こういうカラクリがあったからでした。

つまり、頭の良し悪しは自分一人の力ではなく、協力者の存在により
決まるものだということ。

頭の良い人は、ほとんど頭が疲れないと言われています。

(「海馬 脳は疲れない」より)

それもそのはず、他の協力者が働いているのですから・・・

ぼく（魂）が、帰ってきたのに気付いて、魂の一人が言いました。

「こんな大変な時に！ 早く戻って来いよ！！」

ぼくは、頭ごなしの言い方に反論しました。

「今まで病気の間中、ずーっと、ぼくは肉体の面倒を見てきたんだ。
たまには君たちで肉体の面倒を見てもいいだろう。」

綺麗なバカで生きてやる！

人の幸せは、能力、財力、体力などの持ち物では決まらない。 幸せは人柄が決める。

しかし、この肉体の主体はぼくですから、ここの所をつかれたらどう反論しようかと考えていたのですが、相手は何もいわず仕事に戻りました。他の魂達もそれどころではない、と言う感じで忙しそうに働いていました。

ぼくはふてくされて、また肉体から離脱しました。
天井から病室内を見まわしていると、
2人いた看護婦さんのうちの一人が、病室から小走りに出て行きました。

ぼくは気晴らしに、後を付いていく事にしました。
その看護婦さんは、廊下ですれ違った他の看護婦さんに向かって
「〇〇号室の子、ダメみたいよ。」と言いました。
さらに二言三言、立ち話を交わした後、去って行きました。
今度は走らずに普通に歩いています。
（院長先生の見ている前だけ忙しそうにされていて、見えないところでは立ち話をしたり、普通に歩いたりする、ずるい看護婦さんもいるもんです）

「ダ・メ・み・た・い」ぼくはこの意味が分かりませんでした。
その看護婦さんは、必要な薬を見つけると病室へ戻っていったので、先ほどの意味は分からずじまい。

この意味を知るため、先ほど「ダメみたい」と聞いた相手方の看護婦さんを見つけました。
その看護婦さんは、他の同僚と着替えながら、
「〇〇号室の子供、もう危ないみたいよ」
「かわいそうにね！ 確かまだ3歳だったでしょう？」
「3歳で死んじゃうなんて！」

綺麗なバカで生きてやる！

人の幸せは、能力、財力、体力などの持ち物では決まらない。 幸せは人柄が決める。

“えーっ、ぼく死んじゃうの～”

さっきの看護婦さんは、「ダメみたい」って物が壊れたみたいな言い方をしたけど、ぼくの事だったのか！（酷い言い方するなあ）

そういえば5つの魂たちは、かなり忙しそうにしてたけど、そんなにぼくの病状は悪い状態だったのか！

ぼくは急いで病室に戻り、肉体の中に戻って行きました。
そして、うっすらと目を開けたぼくを見て両親や院長先生は少し「ほっ」とした様子でした。

ぼくは苦しみの中から絞り出すような声で、「ママ、ぼく死ぬの？」と尋ねました。
母は言葉に詰まりました。

父親がそれを見てすかさず
「死ぬわけ無いじゃないか。きっとよくなる。院長先生が必ず直してくれる。」
と言いました。

「だって、あの看護婦さんはぼくが死ぬって言ったよ」
その看護婦さんは、一瞬驚きましたが、次にムツとした表情に変わりました。
もう一人病室にいたかなり若い看護婦さん（おそらく新人）は、ぼくの言葉を聞いて思わず泣き出してしまいました。

綺麗なバカで生きてやる！

人の幸せは、能力、財力、体力などの持ち物では決まらない。 幸せは人柄が決める。

院長先生は、ぼくのことを「ダメみたい」と言った看護婦さんに、「〇〇さん（泣き出した看護婦さん）を連れて行きなさい。それから婦長に来るように伝えなさい」と告げました。

しばらくすると、厳しい面持ちで婦長さんだけが、病室に入ってきました。

綺麗なバカで生きてやる！

人の幸せは、能力、財力、体力などの持ち物では決まらない。 幸せは人柄が決める。

* 幽体離脱 4 *

僕は、自分が死ぬことの真偽を確認する為に、もう一度、あの時見た様子を父親に伝えました。

「さっきの看護婦さんが、廊下のところでぼくはダメみたいと言ってたよ。」

父は：「〇〇〇（ぼくの名前）は夢をみたんだよ。死ぬわけ無いじゃないか！」

でも、あれは夢ではありません。

ぼくは、そのことを証明する為に、ある行動に出ました。

目を閉じ、もう一度、幽体離脱しようと試みました。

思い通り幽体離脱でき、ぼくは病院内を徘徊しました。

先ほど、ぼくのことを「ダメみたい」と言った看護婦さんを探し出すためです。ぐるぐる病院内を廻っているうちに見つけました。

ぼくは、多分あの泣き出した看護婦さんを、慰めているのだろうと思っていましたが、まったく違いました。

廊下で他の2人の看護婦さんと談笑していました。

他の2人の中に、泣き出した看護婦さんはいませんでした。

ぼくは、3人の後ろで話を聞くことにしました。

綺麗なバカで生きてやる！

人の幸せは、能力、財力、体力などの持ち物では決まらない。 幸せは人柄が決める。

「あの子があんなこと言ってびっくりしたわよ。
院長の前であんなこと言われたら、私の立場が無いじゃない。
失礼な子ね！」（失礼なのはあなたでしょう！？）

「でも、そんなこと言うぐらいなら、今も私たちのことを見てるんじゃない！」
「ほら、そこで見ている」
（「ダメみたい」といった看護婦さんの斜め後ろを指差しました。）

ぼくは一瞬ギョッとしました・・・ぼくの姿が見えているの？・・・
でも、指差す方向がぼくの位置と少しズレている???

その看護婦さんは振り返りましたが、誰もいないことを確認すると、
「ヤダ、もうびっくりするじゃない。」と言って笑いました。

「“なんだ嘘なのか！” それにしても人の生き死にを笑い話にするとは、
看護婦さんの中にはあまり心の美しくない人もいるんだな。」
「院長先生の前ではみんな神妙な態度なのに・・・
患者さんの前ではいつも笑顔なのに・・・」
それは嘘（作り物）なのか！と大人の世界を少し垣間見ました。

ところで、ぼくが夢を見ていたのではないことを、証明しなければ
なりませんでした。

綺麗なバカで生きてやる！

人の幸せは、能力、財力、体力などの持ち物では決まらない。 幸せは人柄が決める。

実は、この3人からその情報を得ようと思ったのですが、この3人の話は、冗談話ばかりでしたので、他の看護婦さんを捜すことにしました。

ぼくは看護婦さんが使う専門用語を覚えて、それを話せば信じてもらえると考えていたのです。

実際に、工作中的看護婦さんを見つけ専門用語を覚えて、肉体に戻り父親に話しましたが、父はまったく取り合おうとしませんでした。母親もそんなことには興味がない、と言う様子でした。

仕方なく今晚の所は、静かに休むことにしました。

次の日の昼間（昼はネフローゼの病状が少し落ち着いていました）に、ぼくの話の信じてもらえる方法を考えていました。

父親は少し鈍いし、母親は自分の興味の無いことにはまったく無関心だから、この2人を信用させることは難しいと判断しました。

ぼくの話を理解するには、感が鋭い人でないと難しいと思い、院長先生にターゲットを絞りました。この病院で一番頭がいいのは院長先生ですから。

綺麗なバカで生きてやる！

人の幸せは、能力、財力、体力などの持ち物では決まらない。 幸せは人柄が決める。

その夜、体調の具合が良かったので幽体離脱はお預けでした。

その次の夜も・・・

ぼくは、入院して初めて、身体の具合が悪くなることを望みました。
もちろん、ぼくの話を通じてもらう為です。

それと、幽体離脱したときは唯一ぼくが“苦しみ”と“寝たきり状態”から開放されるからです。

何日か後の夜、具合が悪くなり幽体離脱が起きました。

ぼくは、夜の病院内の徘徊を楽しみながら、院長先生を捜すことにしました。
今まで寝たきり状態でしたから、あちらこちらを見て廻れると思うと、
嬉しくてたまりませんでした。

しかし、このことで怖い目に遭うとは、まだこの時は思いもしませんでした。

綺麗なバカで生きてやる！

人の幸せは、能力、財力、体力などの持ち物では決まらない。 幸せは人柄が決める。

* 幽体離脱 5 *

幽体離脱により、ネフローゼという病魔の苦痛から開放されて、病院内を探検できると喜んでいただぼくでしたが・・・

少し病院内を徘徊した所で、向こうの方に人影を発見しました。少し近づいてみると、その人はこの世のものとは思えないくらいおぞましい姿をしていました。

「誰だろう？」

そのおぞましい姿を見ていると、ぼくはだんだん怖くなりました。だが、どうせぼくの姿は、向こうの人には見えていないから大丈夫だ、と自分に言い聞かせました。

しかし、この人にはぼくの姿が見えているみたいです。ぼくをじっと見えています。

ぼくは怖くなって自分の病室の方へ逃げようと思いました。そのおぞましい姿の人は、ぼくに何かを訴えたい様子でした。でも、ぼくは怖くて逃げてしまいました。

綺麗なバカで生きてやる！

人の幸せは、能力、財力、体力などの持ち物では決まらない。 幸せは人柄が決める。

ぼくは自分の病室の前まで来て悩みました。

「こんな怖い思いをするくらいなら今日の所は肉体に戻ろうか・・・
でも、次はいつ幽体離脱できるか分からないし・・・
それに次に幽体離脱しても、あのおぞましい人に出会う可能性は
同じだからなあ・・・」
と少し考えているうちに気持ちが落ち着いてきたので、
肉体には戻らないことに決めました。

しかし、病院内を探検することは止めて、院長先生を捜すことだけに集中しました。

“でも考えてみれば、ぼくと同じような立場、つまり幽体離脱した魂や霊魂に出会
ってもおかしくないはずでした。ここは病院内ですから人の生き死には、通常の空
間よりはるかに高密度で行われているはずですから”

実は次の日にわかったのですが、あのおぞましい姿をした人は
僕の知っている人でした。

以前、病院内でぼくをかわいがってくれたおじいさんだったのです。
おじいさんは幽体離脱をした直後で、身体の形をした魂が崩れだしていた
最中だったのです。

ただぼくと違ったのは、そのおじいさんはもう肉体に戻ることが
無かったということでした。

綺麗なバカで生きてやる！

人の幸せは、能力、財力、体力などの持ち物では決まらない。 幸せは人柄が決める。

翌朝、母からおじいさんがなくなったことを聞きました。

話を戻します。

ぼくは、病院内を探検するワクワク感がすっかり薄れてしまい、
今度はびくびくしながら院長先生を捜しました。

「院長先生はどこにいるのだろう？」

ぼくは見つけるヒントが無いかと思い、この病院に入院した当初からの
記憶を辿って行きました。

そういえば、入院してしばらく後に、母親におんぶされて、病院内を
見て廻ったことがありました。

その時、母親から、「ここが院長先生のお部屋よ」と教えられてことを
思い出しました。

ぼく：「院長先生って？」

母：「入院した時に〇〇〇（ぼく）を診てくれた先生よ。
この病院で一番偉い先生よ！」

綺麗なバカで生きてやる！

人の幸せは、能力、財力、体力などの持ち物では決まらない。 幸せは人柄が決める。

院長先生が、部屋にいてくれればいいけどと思いながら、
部屋を探しました。

「確かこのあたりだったよな！」

ぼくは、あのおぞましい人に出会わないかと、びくびくしながら
院長先生の部屋の方へ向かいました。

ぼくは、曲がり角を曲がる時が、怖くて怖くて仕方ありませんでした。
だって、曲がり角で鉢合わせしたら捕まるかもしれないからです。
勇気を振絞りながら、角をいくつか曲がり、院長先生の部屋のすぐ近くまで
辿り着きました。

あとは、確かあの角を曲がった先に院長先生の部屋があるはず。
ぼくは、廊下の角からそっと覗き込みました。
思ったとおり、院長先生の部屋がありました。
、あのおぞましい人はいません。

ただ、院長先生の部屋の先が十字路になっており、そこから突然出てくる可能性が
ありました。
ぼくは、最後の勇気（精神的にもう限界にきていましたから）を
ふり絞って飛び出し院長先生の部屋に飛び込みました。

綺麗なバカで生きてやる！

人の幸せは、能力、財力、体力などの持ち物では決まらない。 幸せは人柄が決める。

院長先生は、一人で静かに本を読んでいた。

ぼくは、さすがに病院内で一番偉い人は違うなど、感心しました。

僕は、その本に目をやりました。

そして少し残念に思いました。

ぼくはまだ字を習っていなかったのです。

そのほんの題名が読めませんでした。

（ここで3歳なら、まだ字を読めなくても普通だろうと思われるかもしれませんが、天才だった当時は字を習いたくて仕方ありませんでした。

しかし、それは許されませんでした。

母親との確執で、字はおろか成長につながる事はことごとく奪われていましたから・・・

（この母親との不仲については、別の機会に「母の豹変」でお話します）

ぼくは仕方ないので、ほんの題名の字の形を覚えることにしました。

すると、看護婦さんがノックをして入ってきました。

「院長先生、〇〇号室の患者さん（ぼくのこと）が、また危篤状態です。」
院長先生は、すぐに本を閉じて部屋から出て行きました。

ぼくもあのおぞましい人に出会わないように一目散に自分の病室に戻りました。

綺麗なバカで生きてやる！

人の幸せは、能力、財力、体力などの持ち物では決まらない。 幸せは人柄が決める。

そして、戻る途中で考えてみました。

「何故、あのようなおぞましい姿でいるのだろうか？」

「あのような姿でいることが、いやではないのかな！」

「いやまてよ、ぼく自身も今の自分の姿がどうなっているか知らない。」

(というより、怖くて考えないようにしてきたというのが本音)

「病室に戻ったら、病室にある鏡で自分の姿を見てみよう！」

病室に戻ったぼくは、恐る恐る部屋の入口近くにある鏡の方へ近づいていきました。

そして、ぼくが鏡をそーっと覗き込むと…

綺麗なバカで生きてやる！

人の幸せは、能力、財力、体力などの持ち物では決まらない。 幸せは人柄が決める。

* 幽体離脱 6 *

ぼくが鏡を覗き込んだ時に見たものは、強烈な光でした。
急に部屋がこんなに明るくなるなんて、誰かが病室内で、
大きな電灯を点灯したのだと思いました。

それにしても眩しくて周りの状況も判らなくなるほど強い光でした。

すぐに鏡から離れて、病室内を見渡すと、
不思議なことに普通の明るさに戻っていました。

ぼくは、部屋の中を念入りに確認しました。
誰も光を放つようなものは持っていませんし、
光の事など知らないという様子です。

ぼくは、確認の為にもう一度、鏡の方を見ました。
すると先ほどと同じように強烈な光を放っているものがあります。
今度は、それがぼく自身だと分かりました。

ぼくは、その光の中心部に何があるのか（ぼくの本体）を知りたくて、
怖さに耐えながら見つめていました。

綺麗なバカで生きてやる！

人の幸せは、能力、財力、体力などの持ち物では決まらない。 幸せは人柄が決める。

しかし、そこにはただ光を放つ点があるだけでした。

すごく小さな点です、と言うより、強烈な明るさのために点そのものもよく見えないような感じでした。

「ぼくはこれほど強烈な光を放っているのに、誰も気が付かないなんて
どういことだろう？」

「でも、あのおぞましい姿をした人には、見えていたんだらうな！」

「これじゃ、目立つよなあ」

そろそろ光の恐怖に耐えられなくなったので、鏡から目をそらすと
また病室内は何も無かったかのように普通の明るさでした。

ぼくは、それ以来、鏡を見ないように意識しました。

もちろん鏡は嫌いになりました。

(今から記すことは、3歳当時の感想ではなく、今現在の考えです。

よくこの世では、自分の影におびえると言いますが、あの世では
自分の光におびえるものなのか？

ぼくの使命はこれを克服すること、つまり、「勇気を身につける」ことなのか？

光だけでは何も見えない。影（陰）とセットで役に立つもの！

これは何か新しい発見につながるのでは？・・・)

綺麗なバカで生きてやる！

人の幸せは、能力、財力、体力などの持ち物では決まらない。 幸せは人柄が決める。

ぼくは一つ確認したくなりました。

今ぼくの姿は一つの点だけど、三角形になってみようと意識を集中しました。

ところがまったく形が変わりません。

自分の形が変化していないことは鏡を見なくても三角形の膨らみが出てないことでわかります。

これで納得しました。

あの時、ぼくの身体が崩れ出した時、ぼくは自分の形を修復することをあきらめ、自ら進んで形をなくしていきました。

その時に形の無い点になってしまったのでしょう。

確認したい事が済んだので、ぼくは自分の肉体に戻りました。

ぼくの意識が戻り、しばらくすると院長先生が入ってきました。

すぐに脈をみはじめて、一通りの診察が済み、

「今は落ち着いています」と言われたので、これはチャンスと思い、

次のことを院長先生に伝えました。

綺麗なバカで生きてやる！

人の幸せは、能力、財力、体力などの持ち物では決まらない。 幸せは人柄が決める。

「院長先生本を読んでいたね！」

院長先生は、少し驚いた表情をしました。

でも、ここで驚いてもらっては早すぎます。

本を読んでいたことぐらい当てずっぽうでも言えますから・・・

ぼくは、父親に紙と鉛筆を要求しました。

もちろん、憶えてきた本の題名の形を、紙に書こうと思ったからです。

綺麗なバカで生きてやる！

人の幸せは、能力、財力、体力などの持ち物では決まらない。 幸せは人柄が決める。

* 幽体離脱7 *

ぼくは、ほんの題名を書こうと思って、父に紙と鉛筆を要求しましたが、これにはまったく取り合ってもらえませんでした。

看病している立場からすれば、先ほどまで危篤状態の子供に、

紙と鉛筆は不用のものと思うのは当然でした。

事情を説明しましたが、「夢を見たんだ」の一点張りで

取り合ってもらえませんでした。

父は、古風な人間で、頑固者でしたから、仕方がなかったのかもしれませんが。

仕方なく、ぼくは寝ることにしました。

寝る前に、院長先生の方に目をやりました。

院長先生のぼくを見る目が、今までと違っていました。

今までのように、幼児を見るやさしい目ではありませんでした。

ここから先、お話することは、ぼくにとって苦い思い出です。

従って、要点だけを述べて、幽体離脱の体験を締めくくりたいと思います。

勝手に終わらせて済みませんが、ここから先は幽体離脱に関してのお話というより、人間関係の難しさについてのお話になってしまうのでご容赦ください。

綺麗なバカで生きてやる！

人の幸せは、能力、財力、体力などの持ち物では決まらない。 幸せは人柄が決める。

眠りについた後も幽体離脱が起きて、院長先生の部屋を覗きに行きました。
しばらくすると、院長先生が部屋に戻ってきました。
部屋に入ると周りを2度ほど見渡しました・・・

ぼくを探していたのです・・・なぜなら、ぼくの名を読んでいましたから。
ぼくも「院長先生」と叫びましたが、まったく気づかれませんでした。

ぼくは、院長先生だけでなく、看護婦さんの私生活も覗いていました。
そうです、本来の目的から外れていったのです。

当初の目的は、ぼくの不思議な体験をみんなに信じてもらうことでしたが、
それはどうでも良くなっていきました。

ぼくは、看護婦さんたちがしている廊下での立ち話には特に興味がありました。
幽体離脱するたびに、看護婦さん達のプライバシーを覗き見ていました。

そして、朝方、看護婦さんが熱を測りに来るたびに、それを話して
びっくりさせて楽しんでいました。
隣で看病していた母親は、いつも看護婦さんに
「変なことを言ってごめんなさい」と謝っていました。

そして、だんだん看護婦さん達が、仕事を済ませるとすぐに病室から
出て行くようになりました。
それまでは、ぼくと少しお話などしていたのですが・・・

綺麗なバカで生きてやる！

人の幸せは、能力、財力、体力などの持ち物では決まらない。 幸せは人柄が決める。

母もそのことに気付いたみたいで「最近、看護婦さん達は忙しいのかしら？」
とっていました。

もちろんこれは違います。

看護婦さん達は、ぼくを恐れているのです。

最近、看護婦さん達は仕事中の立ち話や雑談をまったくしなくなりましたから、
有体離脱しても面白くありませんでした。

そして、ついにぼくの良くない噂話は、母の耳に入りました。

あるとき、母が血相を変えて病室に入ってきました。

母は、誰から聞いたのかはわかりませんが、ぼくが看護婦さん達に
気味悪がられていることを知ってしまったのです。

今まで母は、毎朝ぼくが看護婦さんに話していた出来事は、
作り話だと思って軽く受け流していました。

しかし、今度ばかりはかなり気にして、もう作り話はしないように
強く言われました。

それ以降、看護婦さん達は検温に来た際に、付き添いの母がいない
ときなどはぼくを睨みつけて行きました。

もう今までのような笑顔はありませんでした。

綺麗なバカで生きてやる！

人の幸せは、能力、財力、体力などの持ち物では決まらない。 幸せは人柄が決める。

中には、ぼくをおどしていく看護婦さんもいました。

（ぼくには、覗き見をしていると言う罪悪感がありましたから、看護婦さんから相手にされなくなることは仕方が無いことだと思っていました。

でも、脅迫行為をされることには釈然としないものがありました。）

今後は、幽体離脱をしても覗き見はやめようと思いました。

このことで、ほとんどの女の人には、二面性があることを知りました。

（そのように作られているのだから仕方が無いと思います）

でも、一つだけいい発見もありました。

それは、入院した当初から愛想の無い看護婦さんが一人いました。

ぼくは、この看護婦さんから検温をされるのがいやでした。

他の看護婦さんは検診時にはニコニコして、さらに少しおしゃべりなどして行くのですが・・・

この看護婦さんは、笑顔も見せずにやることをやったらすぐに出て行きますから・・・楽しくありませんでした。

だから、この愛想の無い看護婦さんは嫌いでした。

幽体離脱したときの観察でも、この看護婦さんは黙々と仕事をこなすだけで、他の看護婦さんと雑談などしていませんでした。

綺麗なバカで生きてやる！

人の幸せは、能力、財力、体力などの持ち物では決まらない。 幸せは人柄が決める。

しかし、ぼくが他の看護婦さんたちから総スカンを食らって、脅しまでかけられるようになったときに、この看護婦さんだけはぼくの見方になってくれました。

ぼくのことを病院中の噂になり、母や院長先生の耳にまで入っていたみたいですから、ぼくの良くない噂話がこの看護婦さんの耳にも入ったようでした。ぼくの事をふびんに思ったのでしょう。

朝の検診時に少し話し掛けてくれるようになりました。ときには、ぼくに脅しをかけている看護婦さんに注意までしてくれました。

それ以来、朝はこの看護婦さんが検診に来てくれるように祈っていました。（実は、愛想が悪いのではなく作り笑顔をしない看護婦さんだったのです。）

でも、これは序章に過ぎず、さらに悲惨な方向へと進んでいきました。（実から身から出た錆と言えそうですが、女の人は集団でいじめに入るからたまったものではありません）

幽体離脱はこれで終わります。

綺麗なバカで生きてやる！

人の幸せは、能力、財力、体力などの持ち物では決まらない。 幸せは人柄が決める。

* 能力喪失 *

ぼくの腎臓病：ネフローゼは、どんどん悪くなり手の施しようがなくなりました。院長先生からは、もう治らないから退院してほしいと申し入れがありました。両親は院長先生に泣きつきました。

不承不承、院長先生ももう一度だけ治療しましょう、と言うほど思い症状でした。ぼくが危篤状態に陥った時、今までの薬がもう効かなくなっていました。そこで院長先生は、母親に、「この薬は非常に強い薬ですが、今はもうこれを使うしかありません。了解していただけますか？」と尋ねました。

母親はその意味が良く分からなかったようでした。

ぼくは苦しみの中で、“この苦痛から解放されるなら何でもしてくれ”、と言う思いでいっぱいでした。

院長先生はもう一度、母に尋ねました。少し強い口調で・・・

「この薬を使うことを了解していただけますか？」

母は、「この子を助けてやってください。」とだけ言いました。

院長先生は、顔きぼくに注射をしました。

しばらくすると身体に暖かいものを一瞬感じました。

でもその一瞬だけです。

「なんだ、強い薬と言ってもたいしたこと無いじゃないか！

それに苦痛は少しも和らがないし・・・」

ぼくは一時間ほど苦しんだと思います。それから眠りに付きました。

実はこの注射では何も起きませんでした。

強い薬と言っても大したこと無いじゃないか・・・とぼくは思いました

綺麗なバカで生きてやる！

人の幸せは、能力、財力、体力などの持ち物では決まらない。 幸せは人柄が決める。

・・・しかし・・・

数日後、又ぼくは危篤状態になりました。

前の薬が効かなかったことは、ぼくの苦しみようから院長先生にも分かっていたようです。

院長先生は、以前と同様に母に尋ねました。

「これは前とは違う薬ですが、これも非常に強い薬です。
この薬を使うことを了解していただけますか？」

「この子を助けてやってください。」

母も、以前と同様に答えました。

ただ、この前の時とは違って、戸惑い無く事務的に返事をしたように聞こえました。

ぼくも、この前の注射がぜんぜん大したことなかったので、

「へっちゃらだい」と言う気持ちでした。

院長先生が注射をしました。

すると以前とはまったく違って、注射されるとすぐに、頭の中に激痛が走りました。

例えて言えば、わさびの固まりを食べた時のあの“ツーン”とした感じ、

あの10倍ぐらいの激痛が頭の中で起こりました。

「これでは、ネフローゼの苦痛より酷いじゃないか！」

綺麗なバカで生きてやる！

人の幸せは、能力、財力、体力などの持ち物では決まらない。 幸せは人柄が決める。

「まさか、この激痛でネフローゼの苦痛を忘れさそうって言うんじゃないだろうな。」

まじめにそう思いました。

通常、怪我をすると痛みが起きます。

でも、それは少し時間が経つと収まります。

ぼくもしばらくの辛抱だと思いました。

しかし、いつまでも痛みが引く気配はありません。

皆さんも、わさびを食べた時の「ツーン」と来る痛みは、耐えられないでしょう。

それが、10倍もあると悲鳴をあげてしまうでしょう？

そうです、ぼくも悲鳴をあげ続けました。

そして、その「ツーン」とする痛みが1時間続くと想像したら、

気が狂いそうになるでしょう？

ぼくの場合、それが明け方近くまで続いたのです。

ぼくの激痛が少し和らぎ始めた頃、窓から日が差し始めていましたから・・・

ぼくはこのときやっと眠りに付くことが出来ました。

綺麗なバカで生きてやる！

人の幸せは、能力、財力、体力などの持ち物では決まらない。 幸せは人柄が決める。

昼近くまで寝ていたと思います。

ぼくが目を覚ますと母が話し掛けてきました。

内容は覚えていません・・・

ぼくは答えようと口を開けたのですが、ろれつが回りません。

もう一度やってみましたが、やはり思うように喋ることが出来ません。

母は、驚いて院長先生を呼びに行きました。

綺麗なバカで生きてやる！

人の幸せは、能力、財力、体力などの持ち物では決まらない。 幸せは人柄が決める。

* 能力喪失 2 *

ぼくのろれつが回らなくなったことに驚いた母は、すぐに院長先生を呼んで来ました。

この時の院長先生とぼくのやり取りはよく覚えていません。

ただ、ぼくの意識ははっきりしていましたから、この時点でぼく自身は、それほどの不安はありませんでした。

さて、話は少し戻ります。

ぼくが、注射を打たれて頭に起きた激痛で、悲鳴ともうめきとも分からないような言葉を発していた時、身体の中ではあることが起こっていました。

それは、この激痛で脳が破壊されていくのを感じていました。

ぼくは自分を少しでも守らなければと思いました。

そのためには、頭の中の守るべき部分を絞る必要がありました。

すなわち脳の大事な部分だけを守り、他は捨て去るしかなかったのです。

これ以上の表現は難しいので、いわゆる“トカゲの尻尾きりの脳みそバージョン”だと考えてください

しかしこのぼくが捨て去ろうとしている分野には、他の五つの魂がいました。

ぼくは、自分を守る為に他の魂を犠牲にするしかなかったのです。

五つの魂は、捨て台詞を吐いて行きました。

綺麗なバカで生きてやる！

人の幸せは、能力、財力、体力などの持ち物では決まらない。 幸せは人柄が決める。

「散々面倒を見てやったのに・・・」このようなニュアンスだったと思います。

もしこの時、ぼくが脳の一部だけを死守するという方法を取らなければ、表現は悪いかもしれませんが、完全に“脳天クルクルパー”になっていたと思います。

又自分を犠牲にして他の魂を救った場合は、まったく別人格になって、母を驚かせたことでしょう。

だから、今もこの方法しかなかったと思っています。
そして、五つの魂が、捨て台詞をはいていったことも、当然の事だと思っています。

この方法によって、ぼくはかろうじて自分と言う人格だけは、保持できました。
でも、自分が天才と言われた能力を、完全に失ったことに、この時点では、まだ気付いていませんでした。

話を元に戻します。

院長先生は、しばらく様子を見よう、という風なことを、言われたのではないかと思います。

少し時間が経過した後、母が知らせたのでしよう。
父が昼間だと言うのに病院にやってきました。

綺麗なバカで生きてやる！

人の幸せは、能力、財力、体力などの持ち物では決まらない。 幸せは人柄が決める。

父親は、ぼくに話し掛けました。

ぼくは、普通に、今まで通りに喋ろうと、一生懸命に口を動かすのですが、どうしてもちゃんと喋ることができません。

これを見て、父と母が話し合いを始めました。

父「院長先生はどういっているんだ？」

母「○×▼△！▽？◎」

父「×▲#●▽***○！」

ぼくは両親が話し合っている内容の分析を開始しました。

父が、最初にぼくに話し掛けてきた言葉と母に話している言葉を比較してその差を見る。

又他の言葉と比較して差を見る。

これを高速に繰返すことでその人が何を言おうとしているのかを理解する。

表現が下手で分かり難いかも知れませんが、天才といわれた当時のぼくはこの方法で、大人の日常会話を100%理解できていました。

しかし、これが出来ないのです。

最初の言葉を頭に思い浮かべて、次に比較すべき言葉を思い浮かべると、最初の言葉が、スーッと暗闇に消えてしまうのです。

仕方なくもう一度最初の言葉を思い出すと、今度は次の言葉が消えてしまう。

それに思い出すのに数秒かかる。

これでは高速に比較することが出来ません。

綺麗なバカで生きてやる！

人の幸せは、能力、財力、体力などの持ち物では決まらない。 幸せは人柄が決める。

ぼくには、両親が話し合っていることがまったく理解できませんでした。

そして、実は短期記憶だけではなく、長期記憶も出来なくなっていました。
9時過ぎぐらいに、ぼくは母に「今日は朝ごはんが遅いね！」と言いました。
そうです、朝ごはんを食べたことを覚えていないのです。

ぼくは、生まれて初めて忘れると言うことを知りました。
それはとても不安な感じがするものでした。
“忘れるってこういうことだったのか！”
(それまでのぼくは忘れたことがありませんでした。
だから、忘れるということが理解できませんでした。)

でも、この時点ではまだ「へっちゃらさ」という気持ちでした。
手足の怪我はほっとけばすぐに治りますから、頭も同じと考えていました。

次の日には、きっとよくなっている。

しかし、次の日もその次の日も変わりませんでした。

せめて、右脳だけでも残っていてくれたら・・・
(当時は右脳と言う言葉は知りませんでしたが、
すでに保育園に上がる前に右脳と左脳は使い分けていました。)

綺麗なバカで生きてやる！

人の幸せは、能力、財力、体力などの持ち物では決まらない。 幸せは人柄が決める。

ぼくは右脳を使ってみました、こちらもダメでした。

ぼくは、全ての能力を失いました。

でも、これから先で失うのは能力だけでは、ありませんでした。

綺麗なバカで生きてやる！

人の幸せは、能力、財力、体力などの持ち物では決まらない。 幸せは人柄が決める。

* 能力喪失 3 *

天才と言われた能力は、完全に失いましたが、喋る方は少しずつ良くなっていきました。

数日後、院長先生が中年の男の人を病室に連れてきました。

この人は今でいうMR（医薬情報担当者）でした。

その時母親は不在でした。

院長先生が、あの薬をこの子に使ったと言った時、MRは驚いていました。

要約すると、

ぼくに使ったあの薬を、MRが院長先生に勧めたときには、大人の患者さんを前提としての話をしていたみたいです。

MRは、大事な事を言わなかったのです。

幼児には決して使ってはいけないと言うことを・・・

院長先生とMRとの間で少し言い争いが起きました。

院長先生：「どうしてそのことを言わなかったのだ。」

MR：「まさか子供に使うなんて聞いていなかったのだから・・・」

2人は、これ以上ここでは話しませんでした。

ぼくの病室は2人部屋で、隣には二十歳過ぎの女の人が寝ていましたから・・・聞かれるとまずいと思ったのでしよう

綺麗なバカで生きてやる！

人の幸せは、能力、財力、体力などの持ち物では決まらない。 幸せは人柄が決める。

2人が、病室から出て行ってしばらくすると、MRだけ病室に戻ってきました。
MRがひとりで勝手に病室に入ることは、もちろん規則違反です。

MRは、ぼくに話し掛けその受け答えを聞いて「何だ大したこと無いじゃないか！」
と捨て台詞を吐いて病室を出て行こうとしました。

ぼくは、あの薬が他の人に使われたらその人がかわいそうだと思い、
「おじちゃん、あの薬痛かったよ。ものすごく頭が痛かったよ！」と訴えました。

MRは、振り返ってぼくを見ましたが、何も言わずに病室を出て行きました。
ぼくには、悶々とした気持ちだけが残りました。

「あのおじちゃんは、何をするために、もう一度ここに来たのだろう？
ぼくが訴えたのに、何故謝らなかったのだろう？」
以前の能力を失ったぼくには、周りで起きていることが?????でした。

今は分かります。

なぜ病室に戻ってきたのか → 自分の罪悪感を少しでも消し去る為です。

なぜ謝らなかったのか？ → 罪悪感が消えた為です。

母が病室に戻ってきた時、ぼくは院長先生が来たことを伝えました。
母はぼくに、院長先生が何をしにきたのかと尋ねましたが、
能力を失ったぼくには、それに答えることができませんでした。

綺麗なバカで生きてやる！

人の幸せは、能力、財力、体力などの持ち物では決まらない。 幸せは人柄が決める。

母は院長先生に会いに行きました。

戻ってきた母親の表情は暗かったのですが、どのような話があったのかを
ぼくは聞こうとしませんでした。

なぜなら、大人の会話のほとんどはもう理解できなくなりましたから、
聞いても分からないと思ったからです。

その日の夕方、父親が病室にやってきました。

父親が見舞いに来る曜日は決まっていたから、ぼくには???でした。

“今日は来る日じゃないのにな!?”

母と父が話を始めました。

この時の話は思い出せません

ただ、最後の方で父が、「仕方ないじゃないか！新しいこの子を育てていこう。」
というような事を言ったことだけは覚えています。

当時の医療ミスは泣き寝入りが普通でしたから・・・

それを受けて母親は、「施設に預けた方がいいのでは？」という様な事を言った時、
父がいましめたように憶えています。

ある日、母はバカになったぼくに「頭が悪くなっているじゃない！」と
けなしたことを覚えています。

綺麗なバカで生きてやる！

人の幸せは、能力、財力、体力などの持ち物では決まらない。 幸せは人柄が決める。

ぼくは、悲鳴をあげました。

ぼくが、頭の良かった頃は気味悪がっていて、バカになったらそのことをなじる。

「ぼくにどうしろと言うんだ！」という気持ちが、悲鳴になったものでした。

実際ぼくが、じゃまだったのだと思います。

それで施設に預ける話も出したのだと・・・

ここで事情を知らない人は、ぼくの被害妄想だと思うでしょう。

だから、少し説明しておきます。

母は父と離婚して他の男の人とやり直したかったようです。

でも、そのためには子供が邪魔だったのです。

このことは、まだ頭の良かった頃に気付いていました。

母がぼくをなじったのはこの一回だけで、その後1週間ほどは、

今までに無くぼくにやさしくなりました。

まるで幼児と接するように・・・

普通の親子なら当たり前ですが・・・

ぼくは幸せを感じました。

“バカになったけど、母からやさしくされるのなら、天才よりバカの方がいい！”

本当にそう思いました。

綺麗なバカで生きてやる！

人の幸せは、能力、財力、体力などの持ち物では決まらない。 幸せは人柄が決める。

なぜ、母は急にやさしくなったのか？

これはぼくの推測ですが、

ぼくが子供らしくなったからだと思います。

天才児のぼくは、母親に気味悪がられていました。

父からは、嫉妬されていました。

家の近所に同じくらいの子供がいなかったので、暇な時にテレビでNHKの教育講座を見て分数をすでに理解していました。

それを知ってから、教育講座を見ることは禁止されました。

海を眺めて、地球は平面ではないことを、発見していました。

でも、天才児は母にはいらぬ子だったのです。

子供らしい子供を望んでいたのです。

今回のことで、ぼくが母親の理想の子になったと感じました。

そのときは・・・

しかし、1週間を過ぎたあたりから様子が違ってきました。

母親が、いらいらしてくださったのです。

そうです。

ぼくは普通の子供になったのではなく、知恵遅れになってしまったのです。

綺麗なバカで生きてやる！

人の幸せは、能力、財力、体力などの持ち物では決まらない。 幸せは人柄が決める。

そのことに気付いてからは、母はイライラのしどろしどろでした。

でも、以前のように、ぼくを邪険に扱うのとは少し違っていました。

ぼくに文句を言うようなことはありませんでしたから。

ただいつもいらいらしていたのです。

ぼくはついに母の理想の子に離れませんでした。

完

綺麗なバカで生きてやる！

人の幸せは、能力、財力、体力などの持ち物では決まらない。 幸せは人柄が決める。

最後に

ココまでお読みいただきましてありがとうございます。
途中気分が悪くなられた方もおられたのではないのでしょうか？
少し外の空気を吸われたほうがいいかもしれませんね！

ココに記しました体験は、全て真実です。

しかし、序章に過ぎませんでした。
小学校に入学してからが、本当の地獄でした。

私は、母からのいじめと学校でのいじめの2重の苦痛を受け続けました。
でもね、学校でのいじめより母からあびせられる罵声の方がけた外れに辛かった。
何せ実の親ですから。

1日のうち1／5は、泣いていたと思います。
当時は泣かされていると感じていました。

そして、自分の存在そのものが母に嫌われていると思い、
小学2年のときに首吊り自殺をしました。

正確には、首を吊る直前に母に見つかりこう言われました。
「こんな細い紐で死ねるわけないでしょ！」

綺麗なバカで生きてやる！

人の幸せは、能力、財力、体力などの持ち物では決まらない。 幸せは人柄が決める。

それは、引越しの荷造り用の紐でした。

当時の紐はナイロンではなく紙でできていました。

死ぬことは勇気のいることです。

1度機会を逃すと同じようなモチベーションには持って行けません（笑）。

あれほどの勇気は人生でもう2度と出ませんでした。

だから、今生きています（笑）。

さて、

私は頭のいい人が考えていることが分かります。

頭の悪い人が抱きやすい惨めな気持ちもよく分かります。

今の私ですか？ もちろん頭の悪い状態です。

世間では子供のいじめを苦にした自殺や

子供に対する陰湿な犯罪が多発しています。

これは、正しいものの考え方をする人が減ってきている現象だと思います。

綺麗なバカで生きてやる！

人の幸せは、能力、財力、体力などの持ち物では決まらない。 幸せは人柄が決める。

力（感情）は必ず弱い方へと向かうようにこの世界は創られています。

使い道のない力（感情）を創ってしまうと、弱い存在である子供たちへと向かってしまいます。

正しいものの考え方をしているかぎり、
ムダな力（感情）は決して起きませんし、
起きててもスグに消失してしまうほど小さなものです。

今では、私の体験は全て必要なものだったと思います。

もちろん、

私は、偉そうにあなたに教えることなどできません。

ただ、私が苦しみの中から掴み取った正しいものの考え方を
少しでもおすそ分けできれば幸いです。

山口 ひかる